

を推し、一方はカアライルを擔つた。その學生中のリベラルアツションの奉戴する所となつて、當時既に英名噴々たるヂスレリイを凌いで、彼れは此の名譽職に選舉せらるゝに至つた。一國の盛衰が青年の修養にかゝるものであれば、斯かる地位を迄誹謗するのはカアライルとしても賢い方法ではない。果して此榮譽だけは彼れの受諾する所となつた。乍併公開演説の探湯に面と對ふのは、漸く彼れの苦惱とする所となつて來た。四月二日の就任式の近づくにさへ、彼れは其壓迫に堪へられなかつた。エヂンバラに往つた時の模様は、彼れ自身老いの手から、屢々ペンを落しながら書いて居るが、心意等の衰頹は争はれないで、「事實及情況の燻みと、いたましい汚點」とを表はして居た。演説が濟むと「彼れの顔色は是迄見られなかつた。清爽なる悦びに充ちて、精神的苦痛の痕跡すら認められなかつた」のは、正にそうあるべきであつた。是は彼れの一生涯の最高潮の日であつたから。彼れが緩徐

と、續き工合よく、氣高く上品に」話す足下には、多くの學生及び灰色な頭の教授連迄が、恰も「遠い不思議な國の物語を聴く小兒の様に」一心に耳を聳て居た。彼れの態度には、屢々なる雄辯の閃發を引き緊める沈靜があつた。それは自己の成した事業が既に一般的に計量せられて、決して足らざるを認めないもの、落着きであつた。語られた内容は決して彼れの事新らしいものではなかつた。ゲエテやシルレルも引照された。是等の人々は昔のモウゼと同じ様な豫言者の域に迄高められた。彼れは、夫自身高貴なる形ちの勤勉、眞理を究明する勤勉を語つた。それから能辯と財力は如何にして呪はるべきものとなるか。「時代思潮の流れに投錨して動かうともしなかつたオクスフォウト其他の地」の上に来りつゝある力強き變化。又人智は、平明なる幾何學的な鏡の様でなければならぬと共に、それは、あるが儘の凸凹でなければならぬといふ事。最後に、肉體的、精神的健全の無窮の價值。——それは天

才の人と雖彼れの使命を盡し終へた時には屢々靈感の状態から平常の健康状態に復歸する、其現實的平衡が事態の中心點として認めらるゝ所のものであるといふ事であつた。これが終ると多勢の生徒はカアライルの周圍に押寄せた。或者の眼には涙が光かつた。

エヂンバラから歸ると、彼れはスコツツブリヒの田舎に趣いた。その純朴なる人情と、清澄なる天地とは益々彼れを牽き付ける様になつて來た。夫人からは情愛のこもつた手紙を受けた。それには夫人の娘時代の様な矜持が言ひ表はされてあつた。一八六六年四月廿日カアライルから書かれた手紙は實に夫人によつて最早讀まれる事が出来なかつた。翌日カアライル夫人は、夫に何か書き物をして後、公園へ馬車で出掛けた。其馬車の後を追つて來た小犬が、軋れ違つた馬車に觸れて、少し負傷した。カアライル夫人は、馬車が止まるか止まらぬ中、轉び落ちる様にして其小犬

を抱き上げて駛走を續けさせた。馭者が夫人から指圖をも受けず、且夫人の態度が前から變らないのを怪しんで、馬車の中を覗く失禮を乞うた。ジェイン カアライルは亡き人となつてゐたのである。一方南下する途中、ドムフリーの妹の家に滞留してゐたカアライルに電報があつた。彼れの驚愕は如何ばかりであつたか。「翌日彼等は自分を青く日の照つたサツバスの野に逍遙すべく連れ出して呉れたが、嘆息は絶えず病める心から湧き上つて來た。「マイ、ブウア、リツツル ウ、マン」」廿三日カアライル等はロンドンに着いて、カアライル夫人は廿六日ハツヂングトンの父の墓に葬られた。寂しい老いのカアライルが書いた碑文に曰く。

(姓名と年月日の後)

彼の女の光榮ありし生涯に於て、悲しみは常の人に勝りしとは謂へ、その和順なる不撓の精神と、達識なる才氣と、心情の高貴なる忠誠とは世に稀なりき。四十

年間彼の女の夫の忠實にして情愛ある内助者となり、依りて言行共に倦まず彼れを勵まして、彼れの畫策せる價値ある事業に貢融せるは、誠に他者の企及能はざる所に屬す。悠忽彼れより奪去せられ、彼れの光明を消して、一八六六年四月廿一日ロンドンに於て永眠す。

十一

この夫人との永別の打撃に遭つてから、カアライルの其日其日は「破れたる翼の上」にあつた。光明は漸く消えて憂愁の影が墓場の暗みに續いた。抑へ難き若き力の促によつて、征服した思想の世界に彼れの新らしき王國は建設せられなかつたにしても、氣高き智識の王座を占めたのは確かである。此漸く衰へを見せて來た昔ながら

の内部力の閃發は、屢々彼れの傾いた生涯を楯の火の燃え上りの如く、赤き光に染め出さない事もなかつた。乍併、彼れの文字畫又は散文詩的の力は未だ甚だしく害はれなかつたけれども、明に判斷力及び組織的の統合力は衰へ行く證據を見せた。同情を寄する聲は四方から來つた。英國の最高の貴姫^{レディ}からもアウグスタ・スタンレイを通じて仁惠なる慰籍の御言葉が運ばれた。再度迎へられたアツシユバルトン夫人からも、冬をメンTONの別莊に暮らす様との招待があつた。テイנדダル教授の親切なる附添ひの下に、其の地に行つたのは一八六六年十二月であつた。そして馨しい空氣を吸ひ、バイオレット色の海を眺めて翌年の三月迄滞留した。彼れは非常なる自然の愛好者となつた。彼れが南歐の情景を見たらどんなにか好かつたらう。此別莊に於て書かれた手紙又は日記には、自然の描寫が非常に多い。

それは美しい海岸で又非常に恐ろしい。山岳が頭や胸を露出して、荒くれ立てる

があり、巉岩の聳つがあり、壁の重疊するがあり、エンドルの魔女の様に怖ろしいのがある。併し皆其裾を花をつけた緑の衣で纏つて、其擴がり下の方に限られる所に、山々は其足を静かな水に蘸して居る。

然しその栗の樹林の色の褪せた草土の上を獨り逍遙した時の淋しさと、胸を締めつけられる様な哀愁は、曾て彼れは感じた事がなかつた。

自分は重い哀かなしみに従順であつた。悲しみは人に生命の孤獨を教へる。其時には話相手又は慰安等は役には立たない。只人は自己の衷に見出さるゝものに手寄る外はない。神秘と暗黒の裡に、萬物は最善最智の唯一の者に支配されると云ふ確信が人の心に浮び上つて来る、その時吾々は心竊かに言つて見る。「神よ我身を任す」と。先づ是より外の祈りは必要ではない。

此醫し難き淋しさの彼方にあるものを求めて書いた獨白が、彼れの「回顧する事ど

も」である。一八六六年の夏から「是等の哀愁の痛ましさを隠れる爲めの聖殿及宗教市」を打建てる所の營みを始めた。それは「凡ての悲みを、恩愛と無限の憐愍と悔悟的の愛に和ましむる所の奉獻的の仕事である。一人の悲しき全生命を或一人の爲めの涙にひたらせる、そして凡ゆる憤怒も嘲笑も其他の苦々しき要素もいつか解けて流さしむる業」であつた。是は主として彼れの亡妻の追憶記である。それに附加せられて、ア、ピング及ヂエツフレイに就ての回顧と、主としてウオズウオスとサウセイに就て書かれた雜纂とが二卷に編まれてあつた。是に就ては、其或部分及字句の修正なくしては出版する意思のない事を彼れは明言してあつた。然るに是れは彼れの實行管理人によつて出版せられて終つたのである。是と共にカアライル夫人の私信の一部の獨斷的出版は、當時世論の物議の種となつたものとして有名である。斯の如き發表の不徳義であるかどうか、又それがカアライルの名譽の那邊に

迄影響を及ぼすかは茲には略されるにしても、彼れは此「回顧する事ども」の中に於て、彼れの亡妻に對する思ひ遣らるゝ限りの疎漫に悔恨の涙を灑ぐと共に、偶然彼の女の日記から發見せられた生前の苦難に出來得る限りの償ひを與へ、且彼の女を理想の婦人に書き上げ様とする愛惜の情に充たされて居る。こゝには彼れは夢見る人の様に追憶の筆を運んだ。そして書かれたものは直ちに夢の様に朧らに彼れの意識から消えていつた。明らかなる印象は舊の如くに歸つて來ても、彼れの判断力は麻痺して正確と緩和と結合の能力を欠くに至つてゐる。筆者の意思と懸け離れた或原因から起つてゐるといふ事が明かでないにしても、又發表は彼れの欲する所になかつたにしても、此著書の全卷を通じての不實と、不公正と、故なき傷害とは、見通すには餘りに多數で、寛容されるには餘りに顯著であつた。若しも其被害者が宥恕するのを拒むならば、それは其者の全權利内にあるものと謂はれなければなら

ない。

一八六七年自由運動の擴大するに驚いて、一雜誌に「奔落するナイヤガラ」を寄せた。貴族階級に政治的行動を抑止せよとの忠言は、彼れの論據からすれば、彼れの爲し得らるゝ最悪であつた。議會嫌いは彼れには既に一事狂になつて居た。ミルの「自由」は又非常に彼れの怒りを激發させた。彼れがそれを讀むと、丁度其處に居合はせられたルキン氏の方に向き直つて、彼れを（形容すれば）山犬が鼠を振りはたく様に揺り動かした。憐れなルキン氏が「自由」を書きでもしたかの様に。此感情の根柢は甚だ發見するに苦む所である。何となればミルが與ふべきだとする自由は、既にカアライル自身が取つて居る自由であつたからである。彼の最後の文學的の勞作は一八七五年フラアゼル誌に發表した、ノルウエイ初期の諸王といふ論文である。ジョンノックスの眞價に就ての研究が同誌の四月號に載せられた。殊に後

若は燃え落ちんとする彼れの最後の灼熱を示して居る。此頃から彼れは右の手を利かなくして、彼れの思想の表明は口授による寫字の爲めに損はれ勝であつた。一八七〇年に、タイムスに佛獨戰爭に就ての小文が寄せられ、又一八七七年に土其古戰爭に關する小文があつた。

斯かる間に彼れの周圍の故舊知音は、漸く秋深くなりまざる樹の葉の様に散つて行つた。彼れの老後の秘書であり、守り役であつた姪のマリイも、彼れを孤獨に見棄てなければならなかつた。クロウが死に、トウマス・エルスキン、ジョン・フォスタア、ウイルバアフォウスが死んだ。ミルも故人であつた。一八七六年には彼れの弟のエイレットクが加奈陀に客死した。一八七八年にはブンフリーの田舎で、弟のジョンが死んだ。カアライルのみが獨り取殘された様な恨みがあつた。次第に凝り集まつて來る幽暗の雲の中にあつて、彼れは死を生命の餘喘からの釋放であると觀

じた。彼れの信仰は、死後に在ると云はれる夢幻状態に就てのハムレットの疑問に吸ひ込まれて行つた。

自分の順番が來たならば、もう直ぐにも自分は行きたいものだ。醒めざる眠りに入るのではあるけれども、彼方にある人々に合するのだと思へば悦ばしい。是れは衰へ果てた心からの嘔きであると共に、一種の自分にとつての慰安だ。「只何故に滅絶又は永久の眠であるのか？」と問ひたくもなる。然し彼等も自分と同じく神の意思の中にあるのだ。

求めざるに名譽は彼れの後生涯を飾つた。一八七四年には「フレデリック大王」の功績でプロシヤの高級勳位を受けた。同年の終りには當時の首相ヂスレリイがバス十字勳章の受帯を申出でた。それには年金の呈供さへも添へられてあつた。勿論彼れは只拜辭するのみであつた。「彼れの光榮且寛大なる提言も實現さるべきでは

ない。」「名譽の稱號は障害にはなつても、役立つ事にはならないであらう」金は後年になつては充分豊富にある、寧ろ有り餘り過ぎる。」「一八七五年十二月四日の彼の八十回の誕辰には、ランケを筆頭とした獨逸の文學者からの祝電をこめて、賞讃同情の無數の證明狀が集つた。公ビスマルクからの書信も受けた。ベイムの手に成つた黄金の大牌像は、智識階級の著名なる知友及學生等壹百人以上の贈物であつた。

彼れの老いてすらりとした姿は、ロンドン人には決して珍らしくはなかつた。殊に彼れの界限にあつては。長い裾をとつた鳶色のコートと、黒のソフトを、又夏は麥藁帽を冠り、いつもソフトレザーの靴を穿いて、常に襟飾ネッケルを着け、怪しい天氣には雨衣を纏つて（彼は決して洋傘を持たなかつた）彼れは一日に二回はチエルシアの堤か、バツテルシイの公園を一人又は小人数で歩いた。彼れは時とすると、容易には歩いて歸れない程の遠方に迄小迷ひ出る事があつた。チエルシイの馬車の

旅客は彼れの荒くれた顔と、奇妙な兩眼の一方は猛々しくキラついて、一方は夢見る様にとろんとした老人を能く見る事が出来た。又屢々彼れは自分の家の小さな庭に座してゐる事があつた。其時は能く、スレイト色のドレツツィングガウンを着けて、愛猫のテイツプと共に、本を讀むか煙草を喫して居た。彼れは非常に富有であつた。寄附人名簿には彼れの名は出なくとも、匿名で多數量の金を惠んで居た。彼れは悪く言へば慈善狂であつた。一八六七年に彼れは竊に證書を作成して、クレイクンプトツクの収入財産をエヂンバラ大學に寄贈した。それは彼れの妻及彼れの家族の紀念の爲めにジョン、ウエルシユ獎學資金として、薄資の學生の爲めに十口の給費基金を立てた。『最高のものに向つて努力する若く勇ましい精神の爲めに、是れだけの小さな補助の道が、此貧しき處分及遺贈から成立つのだ。願くば永久與ふ限り蘇格蘭の巖から落つる清き水の絲となつて、路傍にある飲料水盤カハに渴ける眞の然るべき

人の爲め流れ出でんことを。ア、メン。』

此小流の水は一八八一年二月五日から潺湲と進り始めた。其日にトゥマス カアライルは最後の言葉の「グウド、バイ」を遺して此世を去つたのである。彼れの榮譽を以てすれば、勿論奥津城としてウエストミンスタア寺院を要求し得べくして、しなかつた。彼れの意思はエツクレフエツチャンの故郷の墳墓に定められてあつた。二月十日に彼れはそこに埋葬せられた。霽と雨の混りが美しく又有名なる送葬客の上を劇しく打つたが、やがて暗れ渡つて明るき日が照り輝いた。

附 録

カアライル略年譜。

年 月	事 蹟
一七九五年二月	スコットランド、ヅンフリー州エツクレフエツチャンに生る。
一八〇七年	エデンバラ大學に入る(半途退學)
一八一四年	アンナン中學校に數學の教師となる。

一八一八年
一八一九年
一八二一年

教職を擲ちエヂンバラに行きて筆を把る。
獨乙文學の研究を始む。
思想生活上の一轉期(所謂永久の否定より永久の肯定へ)

同

一八二二年
一八二三年

ジエイン ベイリイ ウエルシユ嬢と相識る。
新エヂンバラ評論雜誌に「アウスト論」を寄す。
ロンドンマガデンに「シルレル傳」を書く(一八二五年出版)

一八二二—一八二四年
一八二四年
一八二六年一〇月

プウラア家の家庭教師となる。
ゲエテの「ウイルヘルムマイスタアの修業」翻譯す。
ウエルシユ嬢との結婚。エヂンバラ近く構居。

一八二八年
一八二八年
一八二九年
一八三三—一八三四年

スコットランドのクレイゲンブトツク村に幽居。
バアンズ論を書く。
ポルテイル論を書く。
衣裳哲學ファッションを「アラゼル誌」に發表。

一八三三年夏
一八三四年六月
一八三六年四月
一八三四—一八三七年
一八三八—一八四〇年
一八三九年一二月
一八四三年

エマアソン來訪す。
ロンドン市チエインロウ五番地に居を定む。
サアタアレザアタスを米國に出版す。
佛蘭西革命史脱稿、出版す。
英雄崇拜論脱稿、同時に講演す。(一八四一年出版)
「チャアテイズム」出版。
「過去及現在」を書く。

- 一八四五年 クロムウエルの傳脱稿(八月)。出版(十二月)
- 一八四九年 アイルランド巡遊及其論文。
- 一八五〇年 後日小論文集出版。
- 一八五一年 ジョンスターアリングの傳を書く。
- 一八五二年 フレデリック大王の傳着手、獨乙に遊ぶ。
- 一八五八年 フレデリック大王の傳第一卷出版。
- 一八六五年 フレデリック大王の傳全卷完結。
- 同 エヂンバラ大學總長に選舉せらる。
- 一八六六年四月 カアライル夫人の急死。
- 一八六六年 「思ひ出づる事ども」を書く。
- 一八六七年 時事論「シユツテイングナイヤガラ」發表。

- 一八七五年 ノルウエイ初期の諸王及ジョンノックスの傳をフアラ
ゼル誌に寄す。
- 一八七四年 プロシヤのブルドメリットの勳位を受く。英國バス
大十字勳章の受帯を拜辭す。
- 一八八一年二月五日 カアライルの死。

カアライル遺著出版書目

- Reminiscences by Thomas Carlyle, edited by James
Anthony Froude.....1881。
- Reminiscences of my Irish Journey in 1849.....1882。

Correspondence of Thomas Carlyle and Ralph
Waldo Emerson.....1883.
Correspondence between Goethe and Carlyle.....1889


本著述に供したる主たる参考書其他

Life of Thomas Carlyle by Richard Garnett, London,
1895.
Life of Thomas Carlyle by Nicoll Henry John, London,
1885,
A History of Thomas Garlyle (1795—1835) by James

Anthony Froude, 2 vols, London, 1882
A History of Thomas Carlyle (1834—1881) by
James Anthony Froude, 2 vols, London, 1884
The Bibliography of Carlyle (1820—1881) by
Richard Herne Shepherd, London, 1881.
Thomas Carlyle, the Man and his Book by
William Howie Wylie, London, 1881.
Specimen Days in America by Walt Whitman,
London, 1887. (Death of Thomas Carlyle;
Carlyle From American Points of view.)

カアライル著書邦譯目錄

- | | |
|--------|-------|
| 英雄崇拜論 | 住谷天來氏 |
| 英雄崇拜論 | 土井晚翠氏 |
| 衣裳の哲學 | 栗原古城氏 |
| 衣裳の哲學 | 高橋五郎氏 |
| 衣裳の哲學 | 土井晚翠氏 |
| 佛蘭西革命史 | 高橋五郎氏 |
| 過去及現在 | 石田憲吉氏 |

發行所	ルイアラカ	大正十年四月一日印刷
	付  奧	大正十年四月四日發行
	製複許不	
	著者	佐久間 操
	發行者	河本 俊三
	印刷者	奧村 紫樓
	印刷所	洛陽堂印刷所

【定價金壹圓八十錢】

電話九段九六六番
振替東京二〇九一四番

東京市麴町區
洛陽堂印刷所
東京市麴町區雜司二丁目九番地

洛陽堂文藝書類

書名	著者	定價	送料
戀のゲエテ	正富汪洋	二、七〇	一〇
詩聖ゲエテ	中山昌樹	二、八〇	一〇
自然科學者としてのゲエテ	小川政修	一、三〇	〇八
豊麗な花	正富汪洋	二、五〇	一〇
人生ブラウニング	帆足理一郎	二、五〇	一〇
詩集悪の華	馬場睦夫譯	二、五〇	一〇
エミール詩集 觸手ある都會	新城和一譯	三、〇〇	一〇
ロオレンの少女	同	一、七〇	一〇
ダンテ神曲 (全三冊)	中山昌樹譯	各冊 三、五〇	各冊 一八
ハイネ評傳	藤浪由之	一、三〇	〇八
痴人の懺悔	ストリンドベルヒ 木村莊太譯	三、八〇	一八
ヘッペル傑作集	吹田順助譯	二、二〇	一六

帆足理一郎著

▼菊判天金四百五十頁布製
定價四圓五拾錢稅拾八錢

哲學概論

專制主義貴族主義のドイツ哲學は破産し、絶對主義論理主義の形而上學は破滅した。今や哲學も實際經驗の鍛冶場に走り、労働の膏血に洗禮され、民衆文化の琴線に觸れたものでなければならぬ。著者はヘエゲル派の哲學に養成されてロツツエの人格主義に走り、轉じて實際主義の堂奥に參し、今や進化論的生命主義の哲學を擧げて吾が學界に呼號し、傳統哲學の迷妄を破つて新哲學の曉鐘を鳴らしつゝある。本書は早稻田大學に於ける講義の概要であつて、簡單平明、尙哲學の各部門に亘つて在謂問題を取扱ひ、一々明快なる批判を試みてゐる。加るに行文流麗、何等濫晦の跡なく、文壇の新人たる著者の面目躍如たり。單に初學者の入門として適切なるのみならず、新哲學の概觀として稀有の名著である。

▼帆足理一郎譯 教育哲學概論 (四版) ▼定價五、〇〇

正 富 汪 洋 著

▼四六判天金八百頁書十五枚
▼定價金五圓郵送料 拾八錢

ゲエテとシルレル

我が一生を如何に過さむと迷ふ者に「人生の目的は人生其のものだ」と云つたゲエテの言葉が何と響くか。反基督教徒の一人にして眞の唯一の基督教徒也と自ら信じ、カントの根本悪説を笑ひ、人生を愛し、戀愛を娛み、十餘人の美人に思はれ、無畏無癡に堂々と闊歩し獨逸文學史中の大王たるのみならず世界の大人傑、大詩豪として、ナポレオン、シヨツマンハウエル、カーライル、エマソン、ニイチエ、ローラン其他をして讃揚激賞せしめたる最も人間性の完全なる典型と稱せらるゝゲエテを知らざるは恥辱也ゲエテの友人シルレル又世界に鳴るの大文豪、正富先生こゝに千古不滅の兩偉人が生活及び著作を紹介すること親切平明、幸に本書に於てゲエテの安心を自己の安心境としシルレルの不撓不屈の精神を以て、奮闘し、自我を生かして、人生の太陽と輝く新人が現はれたら著者は欣躍せられるであらう。

▼中山 昌樹 著 詩聖ゲエテ ▼定價二、八〇
▼正富 著 戀のケエテ ▼定價二、七〇

岩 崎 重 三 著

▼四六判四百頁挿畫十二枚
▼定價參圓 郵稅十四錢

進化論者ダーウィン

基督神學の謬想の隆に世界の人々が、人間は神の子にして他の動物と全然異れりと自負せるとき、獨り聲を絞つて、人間は他の動物と共同の祖先より進化せる者なりと高唱したるは、進化論者である。春夜の夢にも似たる平和の海に石一つ投ぜられた。無神論と異端と過激派よ、罵詈雑言とは忽ち彼等の頭上に落下した。其の時右手に自然淘汰の矛を掲げ、左手に進化論の楯を持つて立現はれた一人の武者、これぞ偉大なる世界の大科學者ダーウィンである。科學と宗教との葛藤は如何に解決せられたか。ダーウィンの傳記、著作及事業進化論説、哲學説、思想界に及ぼせる影響、これぞ本書の以て解決せんとする所である。彼は果して過激派であるか。乞ふ一讀せよ。

▼ギ ユ ン ター 著 世界自然科學史 ▼定價三、〇〇

51285

内山賢次 譯

▼四六判五百六十頁書五枚
定價參圓卅錢郵稅十四錢

トルストイ 青年時代の日記

「青春の曠野」と呼ばれたトルストイの青年時代は「轉機」を中心とする圓熟期に比べて兎角皮相視されてゐる。本書は彼が十九のときから二十四までの日記である。恰度「幼年」「侵入」「コサツク」等の出た頃だ。それに本文の約二分の一に亘る詳しい註がついてゐる。これを讀むと晩年まで續いた彼の錯雜と焦燥と誘惑とが如何に如實に晩年のそれとは異つた色と力とを以て描かれてゐるかが分る。彼の一生の特徴だつた類稀なる反省と、誠實と、嚴しい理性的要求とが如何に曲りなく此時代から彼のたまこひの第一の坐を占めたことが分る。そして此の時代に加へられた今迄の見解に修正が加へられなければならないことが分る。譯者は多年トルストイの研究に従ひ、優に一家を成してゐる青年思想家である。彼は點描的な原文の一點一劃も苟くもせず忠實に、明快に、些の危げなく譯してゐる。

▼トルストイ著 我等何を爲すべき乎

▼定價三、〇〇

~~304~~

~~A5~~

930.28

SA 45-

終

